服部裕先生を送る

青山英正

服部裕先生がこのたび七十歳の定年を以てご退職になる。日本文化学科の心柱が欠けてしまうようでまことに名残惜しく、服部先生のお姿をお見かけすることのない二十七号館九階フロアがいまだに想像できないでいる。

勝手ながら、服部先生と私は不思議なご縁があったと思っている。二〇〇四年、先生は秋田大学教育文化学部から本学日本文化学部言語文化学科に教授として移られた。奇しくも、私が同学科で、古田島洋介先生の在外研究期間中の代講として人生で初めての教壇に立つ機会を得たのも同じ年であった。また、二〇〇六年に体調を崩された井上英明先生の代講として私が再び本学に出講した際の学科主任が服部先生で、最初の講義の前に、先生が教室までお越し下さりご挨拶いただいたことを今でも覚えている。さらにその翌年、退職される和田正美先生の後任として私が専任講師採用の学科面接を受けた際の主任もやはり服部先生で、面接後、気持ちを落ち着かせるために当時青梅キャンパスの最寄り駅であった青梅線河辺駅近くをあてもなく歩いていた私の携帯電話に、面接通過の連絡を下さったのも先生だった。そして、私は今、学科主任として服部先生を送る文を記している。

二〇〇八年に私が本学に就任した翌年、服部先生は日本文化学部長に就かれた。その時に我が学部が直面したのが、改組とキャンパス移転の問題であった。当時、日本文化学部は青梅キャンパスで学生募集に苦戦していた。そこで、理事会は二〇一〇年度以降は日本文化学部の新規学生募集を停止し、日野キャンパスに人文学部日本文化学科を新設して教員もその新設学科に移籍させることを決定したが、二年生以上の学生が引き続き在籍することになる日本文化学部を青梅に残すか、それとも一括して日野に移転するかについては、学部の判断に委ねられた。

学部長の服部先生は、後者、すなわち日本文化学部をも日野に移転させるという決断を下された。これは大英断であった。そのおかげで、日本文化学部言語文化学科所属の上級生と人文学部日本文化学科所属の新入生とが分断されることなく、一つの同じキャンパスで学び続けることができたのである。もっとも、当初この案を耳にした日本文化学部の学生の中には、青梅の方が通いやすい、青梅キャンパスに愛着があるとの理由で、強硬に反対意見を主張する者もいた。しかし、服部先生は当時学科主任であった柴田雅生先生とともに、そうした学生たちに向けて何度も説明会を開き、彼らの声に正面から向き合い、時に浴びせられる感情的な言葉に対しても声を荒らげることなく、粘り強く説得に当たられた。そして、最終的には教員と事務職員とが在学生一人一人と面談し、全員から同意書を取り付けることができたのである。

広い視野で慎重に考え抜きそれを実現する決断力と実行力、紳士的な態度を崩さぬ忍耐強さ、実行にあたっての計画性や手続きの緻密さ、今私も責任ある立場に立ってみて、それらを兼ね備えることがいかに難しいかを痛感しているが、服部先生はそのような長所をバランス良くお持ちの稀有な方であった。だからこそ、その後も大学の要職を歴任され、二〇一〇年から二〇一二年までは人文学部長を、二〇一二年から二〇二〇年までは実に八年間の長きにわたり教学担当の副学長を務められたの

である。その間、次第に本学の教育に対する評価が高まり、優秀な学生が多く集まるようになったのも、先生のご尽力によるところが大であったと思う。

こうした校務における服部先生のお姿は、先生の教育者としてのお姿とも重なる。先生が常日頃学生に説いていらっしゃったのは、自立ということであった。これは経済的な意味に限らず精神的な意味でも他者に依存することなく、自由に、まただからこそ常に自らの責任で物事を考え行動せよとの意味であったと、私なりに理解している。そのような自立心は他者を尊重する姿勢にもつながるが、私の記憶の限り、先生が学生に対して頭ごなしに説教したり怒鳴りつけたりするようなことは全くなかった。ただし、ご自身のお考えを熱く説かれるお姿は何度かお見かけしたことがあり、学生を一人の自立した大人として遇しつつ伝える言葉には自ずと熱がこもる、そんな先生であったように思う。結果として学生からの信頼が篤かったことは言うまでもないが、その一方で意外に思われるのは、学生や卒業生（特に女子学生）から耳にする服部先生評が、しばしば「かわいい」だったことである。彼らの言う「かわいい」が何を指すのか正確には摑みがたいが、おそらく先生の飾らないお人柄によるものなのであろう。そう言えば、学科会議の席上でも、ある校務の担当者がなかなか決まらない時に、先生がごく真面目な顔で「では殴り合いで」と冗談をおっしゃり、場が和んだことが何度もあった。

服部先生はご研究においても対象に正面から向き合うスタンスを終始貫かれていたように思う。先生の主な研究対象は、オーストリア出身のドイツ語作家ペーター・ハントケである。この作家に夙に注目し、その研究に取り組まれてきた先生のご慧眼は、二〇一九年にハントケがノーベル文学賞を受賞したことで裏付けられることとなった。先生の研究スタイルは、時に難解とも評され、またユーゴスラビア問題で物議を醸したこともあるこの作家のテクストを、無条件に称揚するのでも時流に乗って批判するのでもなく、また安易に抽象的な思弁に傾くことも、あるいは対象の力を借りて自身の文学観を得々と披瀝するようなこともせず、ハントケが言葉を介して世界と対峙するそのありようを、一定の距離を保ちながら抑制の効いた文体で記述する、というものである。すなわち、先生はハントケの生い立ちや経歴のみならずその背景のヨーロッパ史にまで目を凝らした上で、この作家がその時々に抱えていた課題や問題意識に耳を傾け、時には作家の足跡を辿って作家の目にした風景を追体験しながら、その言葉がどこから生まれ何を紡ぎ出そうとしているのかを粘り強く読み解こうとされてきた。少なくとも私の眼には、先生が大文学者ハントケにまさに正面から対峙しようとされてきたと映る。また、先生は近代の個人主義や帝国主義についてのご論考も数多く発表されており、それらのご論考には、現代という時代にも対峙しようとする強いご意志が感じられる。

服部先生は目下ハントケ作品の翻訳書出版に向けた作業に鋭意取り組まれているとうかがっている。おそらく、ご退職後も引き続き、先生はハントケや現代社会に正面から向き合いながら、ご趣味の乗馬も心ゆくまで楽しまれて、なおいっそう若々しくご研究を進められることであろう。そうしたお姿を、あるいはご著書やご論文を通じて、あるいは何かの折にまた直に拝見できるよう心から願っている。

服部先生、お疲れさまでした。そして、ありがとうございました。